

土田杏村の教育観と修身教科書批判 (1)

— 自由大学運動と教育目的論を中心に —

山中 芳和

本研究は、西田幾多郎門下の哲学者で近代の可能性を追求した文明批評家といわれる土田杏村(1891～1934)の教育観と教育の目的に関する議論を考察し、それとの関連において、晩年の著作である『道徳改造論』を対象として、昭和初期の修身教科書批判の内実とその特質を明らかにする事を課題としている。

本稿はその第一報として、杏村の自由大学運動との関わりを考察する事を通して、彼の教育に関する議論が「人格の自律」に焦点化されており、この考えが道徳論の基底になっていることを明らかにした。続く第二報では『道徳改造論』を主たる資料として、杏村の修身教科書批判を考察する予定である。

Keywords : 昭和初期, 土田杏村, 自由大学運動, 人格の自律

1 本稿の課題

1931(昭和6)年11月、『道徳改造論』と題する一冊の著書が刊行された¹。この年の9月には満州事変がおこり、日本が次第に戦時体制に傾斜していくなかでの出版であった。著者は、西田幾多郎門下の哲学者で、近代の可能性を追求した文明批評家といわれる土田杏村(1891～1934, 明治24～昭和9, 本名は土田茂)である。16歳の年に新潟師範学校に入学した杏村は、その後東京高等師範学校に進んで博物学を専攻し、丘浅次郎の大きな影響の下、「学問を研究し、問題を考える自由人の態度を自然の間に教えられ」²る。東京高等師範学校本科博物学部卒業の年には、折に触れて書き綴り、校友会誌に寄稿した諸論文をひとまとめにして『文明思潮と新哲学』と名称をつけ、世に送っている³。次いで1915(大正4)年、京都帝国大学哲学科に入学した杏村は、西田幾多郎について学び、卒業後は44歳で亡くなるまでの生涯を在野の哲学者、文明批評家として生きた⁴。杏村に関する最近の著作である清水真木の『忘れられた哲学者—土田杏村と文化への問い』(2013年刊)の中では、杏村について、「1920年代のわが国の知的世界を代表する人物の

一人であり、彼の手になる膨大な著作は無視することのできない数の読者を知的公衆のあいだに見出していた」⁵と評されている。

教育に関する著作も多く、『自由教育論』、『社会教育学概論』、『現今教育学の主問題』、『教育の革命時代』、『道徳改造論』など、新カント主義の教育学のもとに、理論的には教育における人格形成を重視し、実践面では自由大学運動に見られるような成人教育に関わった⁶。本研究は、この土田杏村が晩年の1931(昭和6)年に刊行した『道徳改造論』を考察の対象として、昭和初期の修身教科書批判の内実とその特質を明らかにすることを課題とするものであり、本稿はその第一報として、杏村の自由大学運動との関わりを考察するとともに、彼の教育に関する議論の中心問題である「人格の自律」に焦点をあて、この考えが道徳論の基底になっていることを明らかにすることを課題とする。

前掲の清水の著作が『忘れられた哲学者』と題されていることからもうかがえるように、土田杏村は、当時の旺盛な著作を通しての活動に比して、今日その存在が省みられることは少ない⁷。たとえば、「今日の教育の状況を思想的側面からふり返り整理し

よう」とした『教育思想事典』⁸においても、また「日本における多種多様な思想文化の歴史的展開を、古代から近現代に至るその豊饒な展開のあり方において日本思想史としてとらえ、その歴史的な背景とともに辞典の上に再現すること」を試みた『日本思想史辞典』⁹においても、土田杏村の項目は見当たらない。しかし、杏村は「可能な限り視野を拡大し、その比類なく広汎な視野に立って発言した文明批評家であり、常に時代を正しい方向に導くことを念願する教育者でもあった」¹⁰という評価を踏まえるならば、大正から昭和初期の社会思潮の中で教育の問題を考察する上で、杏村の存在とその思想および活動の意義は忘却されてはならないであろう。

その生涯を通じて「社会生活の具体的な諸問題の解決を自らの最終的な目標」と看做していた杏村は¹¹、「日本の社会道德、社会生活理想について具体的な見解を述べることは、私自身としては、一の義務であるやうに考へられさへする」と述べていた¹²。本研究の第二報が主な考察の対象とする『道德改造論』の執筆に際しても、「封建主義社会を脱して近代資本主義社会の中に生長している現代日本は、具体的にはいかなる道德思想を持たなければならないか。」¹³との問題意識に基いて、教育界に関わる人々のみを対象とするのではなく、「今日日本の道德思想の水準は、国定修身書によりほぼ示されているから、私はそれを批判することにより、現代日本の道德的見方の改造を国民の間に提議したい」¹⁴との意図を杏村は堅持していたのである。

2 杏村と自由大学運動

文明批評家としての杏村は、講演などの実践活動にも深く関わった。その一つが自由大学運動である。大正新教育の多様な実践が展開していた1921（大正10）年、長野県上田市に信濃自由大学が設立され、以後これを契機として、同県を中心に昭和の初めにかけて民間成人教育としての自由大学運動が展開する。この運動は、「大正デモクラシー運動の教育的表現の一つ」であり、「教育におけるデモクラシー運動が地域の住民とりわけ農村青年の学習・文化要求と結びつき、それに支えられて展開された戦前日本の数少い自己教育運動の一つとして独自の歴史的意義をもつ」¹⁵とされるものである。

自由大学設立の前年、1920（大正9）年の秋から杏村は、長野県小県郡を中心とした青年達に招かれて哲学講習の講師をするなど、この地域での学習活動に関わっていた。自由大学はこのような準備的運動を経て計画されていった。杏村はこの運動を、これまでになかった新しい教育様式と位置づけ、「わ

が国に於ける自由大学運動に就いて」と題して次のように述べている。

「自由大学の運動は日本で起きたものです。しかも長野県で経験してきた大学拡張運動の自然の発展としてかうしたものを産んだのであります。（中略）自由大学といふ名も、それらの勇氣に富んだ青年の中から自然に湧き出てきたものであって、強ひて誰が命名したとも言へない。（中略）従来全く日本になかった新しい教育様式を始めたことになって来た」¹⁶。

ではこの新しい教育様式が意図したものは何であったのだろうか。大正10年（1921）に杏村が執筆した信濃自由大学の設立の趣意書によれば、この運動は「学問の中央集権的傾向を打破し、地方一般の民衆がその産業に従事しつつ、自由に大学教育を受ける機会を得んが為に、綜合長期の講座を開き、主として文化的研究を為し、何人にも公開すること」¹⁷を目的としたものであったことが知られる¹⁸。さらに趣意書は、この運動が「従来の夏期講習等に於けるが如く断片短期的の研究となることなく統一連続的研究に努め、且つ開講時以外に於ける会員の自学自習にも関与すること」に努めることも明示していた¹⁹。

杏村がこのような新しい教育様式の必要を認識し、実践にまで発展させていったのは何ゆえだったのだろうか。杏村によれば、「みんなが大学まで入学しなければ高等教育を受けられない社会制度は不健全」なものであり、「我々は家にいて産業に従事しながらその余りの時間を節約して高い大学教育をうける」ことができるように、「社会の教育制度がさういふやうに改造せられ」る必要があり、そうでなければ「民衆は永遠に大損害を受けている」こととなり、「これは不合理な事です。」²⁰という。当時の高等教育に対するこのような批判からしても、自由大学運動が「知識の独占を排除して、＜民衆へ開かれた学問＞を実現しようとするものであった」²¹といえるだろう。杏村は「私自身教壇にこそ立ってはいないが、職業としては確かに教育者の1人である」²²との自覚を持って活動しており、自由大学運動は「杏村の只一つの教育的実践であった」という評価も可能であろう²³。

杏村の自由大学運動との関わりの様子を、「紫野より」と題した1922（大正11）年の彼の日記の一部によって見てみよう²⁴。

- 2月13日 夜行にて上京。長野県上田へ行く。
自由大学での講義。
- 5月12日 神戸の女教員の会にて講演。直ちに上京。上田へ向ふ。
- 5月14日 小縣哲学会の第三回講義を始める。
二十日、信州より帰宅。

8月10日より12日まで

須坂の高原哲学会にて講義

14日より16日まで

飯田にて講義

25日より27日まで

魚沼夏期大学にて講義

10月14日より17日まで

上田にて自由大学の第二年度の講義

このような関わりを通して展開していく運動の過程において、杏村は同県の下伊那郡飯田町に創設された自由大学への参加を呼びかける「信南自由大学設立趣旨書」（1923年11月）を執筆した。この趣旨書は「戦前日本にあって社会（成人）教育に関して語られたもろもろの提言の中で、もっともすぐれたもののひとつ」²⁵とされているが、そのなかで杏村は次のように自由大学の趣旨を宣言している。

「今や全国の教育は、コメニウスの学校に帰らねばならぬ必要を痛感し始めた。その結果として、理論的には社会的教育の思潮が盛んとなって来るし、事実的には成人教育の運動が前世紀に比類の無い発達を示した。そしてコメニウスの学校の本義から言えば、民衆が労働しつつ生涯学ぶ民衆大学、即ち我々の自由大学こそは教育の本流だとみられなければならぬことが強く主張せられるに至った。」²⁶

コメニウスに立ち帰ることを通して、教育を民衆の生涯にわたっての営みととらえる土田の視座が明示されており、その根底には、杏村が自由大学への参加を呼びかけるリーフレットの一節に述べているように、「我々は人間になるのだ。人間らしい人間になるのだ。からっぽな政治騒ぎや、村治の改良が何のやくに立つか。我々は先ず自分の精神をしっかりと建設しなければならない。」²⁷という考えがあった。杏村の自由大学運動の思想的根拠が「教育の機会均等の思想であり、人権の一部としての学習権を保障しようとする立場である」²⁸ことが、この、人間らしい人間になるという言葉に明確に見られるであろう。それであるが故に、学ぶという行為は杏村にとって「知識の断片を得て虚栄を大きくするのでは無い。考える仕方を深めて人間の品位を高くしていく」営みに他ならなかったのである²⁹。この考えに立って、杏村はコメニウスの構想した学校が、「個人の稟賦を何処までも完全に伸張し、我々の持つただ一つの要求もその儘に萎縮させられてはならない」事を可能にする場であったと理解し、「教育は我々の生涯にわたって為される大事業」であり、「教育により自己が無限に成長しつつある事を除いて、生活の意義は無い」³⁰というように、生活とは教育による自己成長の連続的過程に他ならないとし

たのである。

では、杏村は自己成長を促していく教育の目指す方向についてはどのようにとらえていたのだろうか。杏村が「信南自由大学設立趣旨書」をまとめた翌年の1924（大正13）年8月に、長野県下伊那郡飯田町において刊行された「伊那自由大学とは何か」と題した「自由大学パンフレット」を見てみよう。杏村は次のように述べている。

「現代の社会的要求は、最も広い立場から見て、すべてデモクラシイの要求だと考え得る。（中略）デモクラシイは個人的に見れば、個々の人格が其の判断と行動とについて他より強制せらるるところなく、完全に自律することを意味し、社会的に見れば、個人は其の個有する能力の凡てを完全に生長せしめ、個性的に社会の創造に参画することを意味する。（中略）デモクラシイの目的は何處にあるか、個人的に見れば、各人は自己の人格を完全に自律せしむることより進んで、更に社会人としての自覚に立ち、能動的に他の社会人の判断と行動とへ協同することにより、すべての社会人の人格を自律せしむるやう行動しなければならない（中略）我々の自由大学の理念となるものは、実に右に論じたデモクラシイの前提及び目的となった教育の理念其のものに外ならぬ、自由大学の教育は、終世的の教育である、其れは社会的の教育である、其れは各人の固有する能力を完全に個性的に生長せしむる教育であるから、教育が社会の何人かに独占せらるゝことを否定する」³¹。これは杏村らが目指す自由大学の理念を述べたものであるとともに、「我々の自由大学の理念となるものは、実に右に論じたデモクラシイの前提及び目的となった教育の理念其のものに外ならぬ」と述べているように、杏村における教育の理念もまた明示されている。このパンフレットに明言されているように、杏村は自律した個々の人格がそれぞれの判断に基いて自発的に行動し、社会の創造に参画することがデモクラシーであるとしたのであり、教育の目的はそうした「人格の自律」に焦点化されているのである。

自由大学の設立趣意書をまとめた翌1924（大正13）年、杏村は『教育の革命時代』を刊行した。その中で杏村は、これまでの日本の教育界が社会問題や社会改造の実際的な運動との接触を断ち、傍観者の位置からそれらの問題を忌避していたのではないかと問いかけ、「今我々の前には教育の革命時代が来た。（中略）教育を通して社会は本当に改造せられる。併し同時に教育は、社会改造への執意によって、本当に動かない、教育への勇氣と心熱とを與へられる」とのべ、この『教育の革命時代』の執筆の意図は、「教育を通ほして社会を改造する」とはい

かなる方策によってであるか」を論じることにあるとした³²。

第一次大戦後のデモクラシーの状況下での自由主義的な思潮を背景に、児童生徒の個性や自発性を尊重する教育実践が多様に展開していた。しかし杏村によればそのような「現在の教育は、ブルジョア、リベラリズムの其れである。頑強なるブルジョアカルトである。どんな新しい様式の方法を採って為されようと、其の目的、其の内容がブルジョア、リベラリズムの基礎の上に立つ以上、其れは決して本物の教育では無いのである。」³³ととらえていた。この考えからすれば、杏村の実践活動であった自由大学運動は、山口和宏が指摘するように、「いくつかの民衆大学を設立すればそれでよいという活動ではなく、少なくとも杏村にとっては社会全体を理想的なものに改造していこうとする社会運動であった」³⁴といえるだろう。

17世紀の中葉に、コメニウスが『大教授学』の第11章において、「本来の目的に完全に答える学校は、いままでに存在しなかったこと」³⁵と題して、既存の学校の根本的な誤りを批判した時、その批判の対象は、学校はまだあらゆる場所に設立されてもいず、あったとしても貧乏人を排除し、卓抜な知能が埋もれてしまうような学校であり、入学できた者のためには知能の拷問室に過ぎなかったという当時の学校教育の実態であった³⁶。そのような現実の中でコメニウスは「人間は、人間になるべきであるとすれば、人間として形成されねばならぬこと」³⁷ととらえ、それを可能にする学校のあり方と教授の方法を探究した。ローベルト・アルトの『コメニウスの教育学』によれば、ライプニッツ（1646-1716）は、コメニウスの活動の進歩的性格を明確に認識し、来るべき時代に対するコメニウスの意義を予見して、「汝、コメニウスよ、汝がおこない、汝がのぞみ、汝がねがい、よき人にたたえられん、そだてられん、いつの日にか。」³⁸と讃えたが、杏村もまたそのような1人として、このコメニウスに学ぶなかで、既に引用したように、「コメニウスの学校の本義から言えば、民衆が労働しつつ生涯学ぶ民衆大学、即ち我々の自由大学こそは教育の本流だとみられねばならぬことが強く主張せられるに至った。」と説き、運動の核心に据えていたのである。

3 杏村の文明観と教育目的論

杏村が活躍した当時の状況は、大正デモクラシーの時代を経て、大正末年から昭和初年におけるマルクス主義と共産主義的運動の高揚期、そして昭和ファシズムの時代という時代的特質を孕んでおり、在

野の文明批評家としての杏村は、それぞれの時代思潮に対して敏感な反応を示した³⁹。1930（昭和5）年に刊行された『文明は何処へ行く』も、「現代文明はどうか。」という問題に対する杏村の姿勢が貫かれたものであり、「急速度を以て新しい様相を展開せしめた現代文明の中心点」を探り、「機械と芸術と社会経済生活とイデオロギイと社会改造論との問題が全体的にいかにか統一せらるべきであるか」を考察したものであった⁴⁰。

現代の社会に常に関心を向け、社会生活の具体的な諸問題の解決を生涯にわたるみずからの使命として理解していた杏村⁴¹は、文明を批評する際の視点を次の三つに集約して述べている。すなわち、「第一に、或る文明の動きがあるとすれば、その動きを我々は結局否定し得るか、或いはまた我々は結局どうにもその動きを否定し得ないものであるかを考へなければならない。第二に生活体系が無数に交錯し、我々はそれの選択及び批判に惑ふとしても、我々はこれらの生活体系の中で何が最後の決定要素であるかを見極める必要がある。第三に、これらの生活体系について、何れが我々の生活を全般的に自由ならしめるか、或は何れが我々の生活要求を最も豊かに充たしてくれるかを検討しなければならない。」⁴²。これらのなかで、文明の真価は、第三の視点である「生活における自由」の問題に深く関わるとして次のようにいう。

「我々は文明の動きについて、その動きは真に我々の生活を自由にし、我々の要求を豊かに満足せしめてくれるものであるかどうかを検討しなければならない。換言すれば、我々は文明の動きに対して、その値打即ち価値を批評しなければならないのだ。また価値を批判するといふ場合には、そのものが真に我々の生活を自由にし、我々の要求を豊かに満足せしめてくれるものであるかどうかを、常に検討しなければならないのだ。」⁴³

杏村において文明とはまずは現在の人間の生活を豊かにするという視点からその価値が判断されるべきものであった。とはいえ、「自分だけが生活内容のうえで幸福であるのは、まことに幸福である所以ではない」のであり、「社会人のすべてが、より高く、またより大きく幸福でなければならない」という⁴⁴。杏村をして教育の問題に積極的に関わることを可能にならしめたのは、「この社会人といふ中には、自分と同時代に生きている人たちがばかりが含まれず、今後無限に生れて来る人たちが含まれる」⁴⁵というように、次代を担う若い世代を社会人の範疇に取り込んだことによると考えられる。杏村は次のように述べている。

「我々は社会人のすべてを幸福ならしめるためには、我々の次代の人をも幸福に生かすことを考へ、そのより高いより広い立場に立って、自己の生活を次代の生活のために犠牲にしなければならぬ場合も起こる。かやうにして人類のすべてを自由にし、人類のすべての要求を豊に満たすことによって我々人類の生活凱歌を奏しなければならない。」⁴⁶

ここに明らかなように杏村は、現在を生きる人間の生活とともに、次代を担う世代の未来における生活をも幸福にする可能性を内に含みこんだものが文明の価値ととらえていたのであり、杏村の教育目的についての理解は、このような文明観を基盤として導き出されるものであった。

杏村は「一体教育の目的もしっかりと分からないのに、どんな方法の教育をしようといふのであるか」とのべ、教育目的を論じる事は教育に関しての研究の殆ど大半をしめる重大なものであるという⁴⁷。しかしながら、教育の目的論は、杏村の見るところ、「従来我国の教育学、例へば師範学校で教へてゐる教科書の教育学では（中略）軽率な取扱ひ」がなされており、「我が国の教育研究は従来方法の末枝に拘泥しすぎた」ものであった。杏村はそのような現状をもたらしめた原因の一つとして附属小学校の存在を指摘し、「各師範に付設せられている附属小学校なるものは、多少の責任を持たなければなるまいと思ふ。何故かと言へば、附属小学校の研究するものは主として教育の方法、その技術的方面に限られていた」と批判するとともに⁴⁸、「すぐれた教育は、参観に行つたときに、或る特別の教育方法をやつて居て、参観者のどぎもをぬいたという風のものであつてはならないと思ふ。近頃の何々主義教育は、大抵さうした馬鹿らしい芝居じみた教育方法を取つて居るのはいやな事だ。新しい教育とはたゞその教育の精神が新しいのだ。教育目的のつかみ方が新しいのだ。」⁴⁹とのべ、教育研究の新しさや卓越性は、いかに教えるかよりも何を教えるかに見出されるべき事を指摘しているのである。

杏村のこのような批判からもうかがえるように、大正期の新教育は、教師自らが教育における自由な研究と実践の主体者たろうとする意識の反映であつたが、国家主義的臣民教育の非合理的目的観それ自体には批判の眼が向けられない中での教える方法の改革は、子どもたちの人間らしい成長・発達を保障する教育にはなりえなかつた⁵⁰。杏村は1923（大正12）年4月の『教育の日本』に掲載した「教育と宣伝」と題した論考の中で、明治以来の教育が「国家が絶対の権力を以て、自分の膳立てした教育内容を国民の上へ強制する」⁵¹ものであつたと述べ、こ

れを「宗教的帰依を我々に要求するところの、其の国家の教権である」⁵²ととらえていた。批判は森有礼の師範学校令が求めた教師像にも投げかけられた。杏村は師範学校令第一条に示された「順良、信愛、威重」の三つの気質が「師範学校の教師養成の目標として常に其の生徒に要求せられた道徳」であるとしたうえで、次のように批判していた。

「順良とは何か。教権の宣伝への屈從的宣誓ではないか。信愛はその宣伝運動を団結的行動によって為さうとの宣誓だ。威重に至つては愛想がつきる。其れは教権の神々しさをおとすまいとの心配から要求した教師道徳である。」⁵³

自らも16歳の若き年に入学した師範学校の養成する小学教師を、杏村は「いかにも其の順良、信愛、威重により、枯木の如く人情味の無い、焼土の如く風韻の乏しい、砂丘の如く鈍重なものになった。打てばビンと音のするところを骨抜きにせられた」⁵⁴とのべ、「近來の教育の沈痾は、教育者が教育の目的論を忘れ、其の方法論に沈没した事に起因する」⁵⁵と指摘し、そのような教育は「人を人にする教育ではなくて教権による宣伝」⁵⁶であるとした。さらに杏村はこのよう「国家による宣伝教育が、過去に於いて有効に国民の心の髓までしみ通つて來た事に寧ろ敬歎しなければならない」としつつも、「其れが果たして人間を人間にする為の教育であつたらうか」⁵⁷と問い、「元來教育といふことは、人間の理性を呼び覺まし、其れの自律的活動を促すことである」⁵⁸と断言するのである。

ここで杏村が『自由教育論』のなかの「教育目的としての自律的人格」を論じた部分において「教育の目的は何であるか」の問いを立て、次のように述べている部分を見てみよう。

「教育の目的は何であるか。それは人生一般の目的に依存する。然らば人生一般の目的は何であるか。我々の言っている意味においての価値である。かくして意義ある人生を送るとは、結局、無限の経過において、無限の努力を以て、我々の所謂価値を追及することであります。教育はそれ故に、被教育者を斯様な人物にまで作り上げることを目的として行われなければならないのであります。（中略）それは人格の自由化、人格の自律に外ならぬのであります。教育はそれ故に、人格の自律を目標として進まなければならない」⁵⁹。

このように児童の自律的人格の確立が教育の目的であり、それが自由教育ととらえられていることは明らかであるが、それは決して「子供の持っている凡ての本能なり欲望なりを生長させていく」という「自然的成長」を意味するものではなかつた。子ど

もを成長させたいという願いは、「子どもを理想的に成長させたい」という、当為の法則によって支配された「目的的成长」であり⁶⁰、それは文化価値の実現によって可能となる。杏村は「自然主義と文化主義」と題して次のようにいう。

「我々は、一面においては我々の人格を自律化せしめなければならない。そして価値の追求を活動の目標にしなければならない。これを他面から言ひ換えれば、我々は十分完全に価値化せられた個性的文化を創造するやうに努力し、そこに進歩の目の見える歴史的文化生活を創り上げなければならない。」⁶¹ 杏村は、大正時代の半ば以降日本語の語彙に取り入れられ使われるようになった新しい言葉であった文化⁶²を、自己の思想の根本概念に位置付けたのである。彼の手になるものはすべて文化の意味を明らかにする作業の一部をなすものであり、彼は自らの思想的立場に対して「文化主義」の名をあたえたのであった⁶³。杏村は『自由教育論』のなかで、「何を文化と呼んでいるか」の問いを立て、文化という概念の属性として、「文化は個性的である」「文化は価値を持つ」「文化は歴史を離れない」「文化は人格の創造である」の四つの特徴をあげている。すなわち、文化とは人格が創造したものであるがゆえに、その中に価値が個性的に実現されており、その文化の連続が歴史に他ならないとするのである⁶⁴。杏村の教育目的論においては、文化的価値への追求が人格の自律に直結するのであり、そのような価値への実践的態度を被教育者に形成する教育が杏村における自由教育に他ならなかったのである⁶⁵。

これまで見てきたように杏村においては、教育の目的は自律的人格であるが、教育の実際において人格を自律せしめるようにするには、「学習のあらゆる機会に於いて児童の自律的人格活動を展開せしむる」とのべ、道徳や訓育においても「既に出来上がった道徳や知識の丸薬を與へて、自然に彼等の消化力を弱めることを為さない。新しい生活様式の発見者は児童自身である」といい⁶⁶、さらに「訓育にあつては、先づ児童の道徳的判断を自由化せしめようと努める。その社会の伝統的判断から離れた自由思想を建設せしめるやうにする」⁶⁷とも述べているのである。

では、杏村はこのような自らの教育観の中で、国定修身教科書に基いた当時の道徳教育をどのように受け止めたのだろうか。杏村は『教育の革命時代』の序文の中で、「此處に述べた理論を基礎として、現在の教科書の内容を批判し、且つ時代に適應しての其の取り扱いはいかなるものであるかを論じた小著を、私は近く公刊したい」⁶⁸と述べ、『道徳改造論』の刊行を予告していた。第二報においてはこの書を主

たる資料として、杏村の修身教科書批判を考察する。

注

- 1 土田杏村『道徳改造論』1931年、第一書房、全236頁。この書は1935（昭和10）年刊行の『土田杏村全集』には、『道徳論』の題名で収載されている。
- 2 上木敏郎『土田杏村と自由大学運動』（誠文堂新光社、1982年、36頁）。
- 3 「土田杏村年譜」（『土田杏村全集』第15巻、第一書房、1936年、66頁）。
- 4 上木、前掲書、11-49頁。
- 5 清水真木『忘れられた哲学者— 土田杏村と文化への問い』（中央公論社、2013年、5頁）。
- 6 同上213-214頁。
- 7 上木敏郎は前掲の『土田杏村と自由大学運動』において、杏村没後未だ10年とは立っていない頃、すでに彼は学問、ジャーナリズムの世界から半ば忘れられ無視された存在になっていたという（36頁）。
- 8 『教育思想事典』教育思想史学会編（2000年、勁草書房）。
- 9 『日本思想史辞典』（ぺりかん社、子安宣邦監修、2001年）。
- 10 上木、前掲書、6頁。
- 11 清水、前掲書、224頁。
- 12 土田杏村『道徳改造論』（第一書房、1931年、5頁）。
- 13 同上。
- 14 同上、3頁。
- 15 国立教育研究所編『日本近代教育百年史 第七巻、社会教育1』1974年、1129頁。杏村の自由大学運動については多くの先行研究がある。池田進・本山幸彦編『大正の教育』（第一法規、1978年）では、稲葉宏雄が「土田杏村の教育思想と自由大学運動」と題して、杏村の文化主義及びプロレットカルト論との関連において自由大学運動を論じている。近年のものとしては、山口和宏が『土田杏村の近代』（ぺりかん社、2004年）において、「自由大学は結局のところもともと自己教育の意欲を内在させていたごく少数の農村青年を組織したにとどまり、全民衆の自己教育機関とはなりえなかった」（199頁）と指摘している。
- 16 土田杏村、「我が国における自由大学運動に就いて」（『土田杏村全集』第14巻、第一書房、1935年、301頁）。これは、雑誌『文化運動』（大正11年、1922）に掲載された。
- 17 同上、304頁。
- 18 自由大学運動として展開する杏村の社会教育

- 論に注目し、その背景にある杏村の思想との関連から、プロレットカルト論について考察した最近の論考に、古市将樹の「土田杏村のプロレットカルト論に関する研究—教育観のパラダイム—」（『早稲田教育評論』17（1）、2003年、早稲田大学）がある。
- 19 注17に同じ（304頁）。
 - 20 注17に同じ（309頁）。
 - 21 山口和宏『土田杏村の近代』（ぺりかん社、2004年、193頁）。
 - 22 土田杏村『現今教育学の主問題』（『土田杏村全集』第一書房、1935年、499頁）。
 - 23 昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』（第37巻、昭和48年、昭和女子大学近代文化研究所28頁）。
 - 24 土田杏村「紫野より 1922年の日記」（『土田杏村全集』第14巻、第一書房、1935年、323-326頁）。
 - 25 宮坂広作『近代日本社会教育史の研究』（法政大学出版局、1968年、461頁）。
 - 26 上木、前掲書、158-159頁。
 - 27 これは杏村が魚沼自由大学と八海自由大学のために、自らガリ版を切って参加を呼びかけたアピールの一節である。上木、前掲書、192頁参照。
 - 28 宮坂、前掲書、495頁。
 - 29 注27に同じ、193頁。
 - 30 同上。
 - 31 土田杏村「自由大学とは何か」（『伊那自由大学とは何か』自由大学パンフレット（1）、信濃時事印刷部、1924年8月、1-3頁、国立国会図書館近代デジタルライブラリー）。このパンフレットには、土田の他に、高倉輝と新明正道が寄稿している。古市将樹は「土田杏村の社会教育論に見る教育観の転換の構造」（日本社会教育学会紀要、No.38、2002年）においてこのパンフレットの内容に言及している。
 - 32 土田杏村『教育の革命時代』（1924年、中文館書店、序文、2-3頁。国立国会図書館近代デジタルライブラリー）。
 - 33 同上、序文、1頁。
 - 34 山口和宏『土田杏村の近代』（ぺりかん社、2004年、22頁）。
 - 35 『大教授学』第11章（『世界教育学選集』24、明治図書、1969年、110頁）。
 - 36 堀内守『コメニウス研究』（福村出版、1970年、42頁）。
 - 37 『大教授学』第6章（『世界教育学選集』24、81頁）。
 - 38 ローベルト・アルト著、江藤恭二訳『コメニウスの教育学』（明治図書、1959年、189頁）。
 - 39 池田進・本山幸彦編『大正の教育』（第一法規、1978年、302頁）。
 - 40 土田杏村『文明は何処へ行く』（『土田杏村全集』第8巻、1935年、119-120頁）。
 - 41 清水、前掲書、224頁。
 - 42 土田杏村『文明は何処へ行く』（『土田杏村全集』第8巻、1935年、177頁）。
 - 43 同上、186-187頁。
 - 44 同上、188頁。
 - 45 同上、189頁。
 - 46 同上。
 - 47 土田杏村『自由教育論』（『土田杏村全集』第6巻、「教育目的論」、1935年、20頁）。
 - 48 同上。杏村は附属小学校が設置されている目的からして「さうなるのは自然の形勢かも知れない」としながらも、「附属小学校は全国教育の模範を示してゐるものだとの考へが、すべての教育者の頭に染み込んでゐるものですから、万事に附属小学校本位となる」のであって、その結果「教育の技術的方面が何よりも重要なものであると考へられるに至ったのである。」という（『土田杏村全集』第6巻、「教育目的論」、1935年、20頁）。
 - 49 これは杏村が「地方教育雑感」と題して、『芸術自由教育』（1921年9月）に掲載したものである（『教育の革命時代』124頁）。
 - 50 池田進・本山幸彦編、前掲書、426-427頁。
 - 51 土田杏村『教育の革命時代』46頁。
 - 52 同上、48頁。
 - 53 同上、57-58頁。
 - 54 同上、58頁。
 - 55 同上、60頁。
 - 56 同上、114頁。
 - 57 同上、52頁。
 - 58 同上、57頁。
 - 59 土田杏村『自由教育論』（『土田杏村全集』第6巻、「教育目的論」、199頁）。
 - 60 同上、240頁。
 - 61 同上、218頁。
 - 62 清水、前掲書、27頁。
 - 63 清水、前掲書、7頁。
 - 64 土田杏村『自由教育論』（『土田杏村全集』（第6巻、「教育目的論」、1935年、211頁）。
 - 65 池田進・本山幸彦前掲書、305頁。
 - 66 土田杏村「自由教育と童話文学」（『教育の革命時代』396頁）。
 - 67 土田杏村「ブルジョア、リベラリズムの訓育」（『教育の革命時代』110頁）。
 - 68 同上、3頁。

